

「英熟語」のかしこい学び方—「SPO理論」への招待

刀祢 雅彦

1. 丸暗記は得か損か

1つの大きな段ボール箱に、すべての書類を放り込んで保管しているオフィスがあったら、あなたはご想像ですか？「英熟語」を丸暗記させるのもそれと似ているのではないのでしょうか。

限られた時間の中で数多くの表現を扱わねばならない学校の現場では「これは『熟語』だ。こういう意味だから覚えておきなさい」という教え方になりがちです。でもそれは、意味が生まれるしくみ＝構造性・分析可能性の説明を放棄することであり、思考の停止命令ではないのでしょうか。また、単独で覚えるしかないと宣告することにより、その表現の背景に隠された他の表現群とのつながり＝体系性を断ち切ることもなるのではないのでしょうか。そのようにして孤立した「熟語」を覚えたとしても、その記憶は危うく、理解は表面的なレベルにとどまるのではないのでしょうか。

ここでは数研出版の『UPGRADE 英文法・語法問題』にも生かされている、「英熟語」を考えるための1つのアプローチとして「SPO理論」をご紹介します（理論というほど難しいものではないですが）。先生方が英熟語を考えるヒントになれば幸いです。

2. 「SPO理論」とは

多くの英熟語には前置詞が含まれています。漢字で言えば「部首」みたいなものです。前置詞を考えずに熟語を覚えるのは、部首を知らずに漢字を覚えるようなものでしょう。前置詞の意味と用法を明確にとらえるためにはどうすればよいのでしょうか。次の問題を見てください。

1) She looks great () the hat.

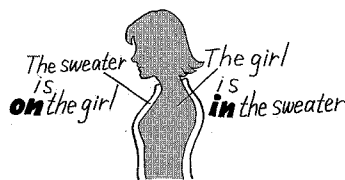
「彼女にはそのぼうしが似合う」

2) The hat looks great () her.

「そのぼうしは彼女に似合う」

これらはnative speakerには簡単そうな問題ですが、「()に入るのはonかinか」と問われると、意外に混乱する学生が多いのです。なぜ1)はin, 2)はonになるかということの説明しようとすると、いわゆる学校文法では困難です。in the hatもon herもただ「looks greatを修飾する副詞句」と言うだけで終わってしまうからです。これらの使い分けは次のしくみを押さえれば簡単にできるようになると思います。

A + in B 「A(人の体)がB(着用物)に入っている」
→ 1) She + in the hat
B + on A 「B(着用物)がA(人の体)に接している」
→ 2) The hat + on her



ここでAとかBはいわば「前置詞の意味上の主語」だと思ってください。「前置詞の目的語」という用語は、たいていの文法書に載っていますが、「前置詞の主語」というものを考えてみるわけです。「主語(S) + 前置詞(P) - 目的語(O)」というこの主述関係の構造は、同じ前置詞を使うかぎり、文構造が変わっても不変です。たとえば次の3つはすべてA + in Bを含んでいます。

例 Men in Black

She walked in boots.

I saw her in a bikini.

このパターンを覚えれば、少し発展的な問題でもすっきり理解できるようになります。

3) They put me () handcuffs.

「彼らは私に手錠をはめた」

4) She put the ring () her finger.

「彼女は指に指輪をはめた」

3) はかなり英語が得意な人でも, put on「～を身につける」という丸暗記のせいで, うっかり on を入れたりするのですが, **me + () handcuffs** という SPO 構造なので, 答えはもちろん in です。

一方, 4) は「はめる」という日本語のイメージがじゃまするのか, in を入れてしまう学生が少なからずいます。 **the ring** (着用物) + **on her finger** (体の一部) が正解ですね。

次にこの 4) を基にして以下のような文を考えてみましょう。

5) She put **the ring on**.

6) She put **on the ring**.

4) から文脈的に自明と思われる her finger を省略したのが 5) です。構造としては「指輪を on (体に接した) 状態にする」ですから, the ring と on の間には主述関係があります。つまり SVOC の構造ですね。この on は「副詞」などと不当な名前では呼ばれているので, なにか前置詞とは無関係な印象を与えます。でも 4) の on と 5) の on の違いは, He likes **reading books**. と He likes **reading**. における他動詞・自動詞の違いと同じようなものでしょう。「他前置詞」と「自前置詞」とでも言いましょうか。

さらに the ring と on を逆転させたのが 6) です。これは次の変形 (SVOC → SVCO) と似ています。

Genetics **made** a wide range of new technologies **possible**.

→ Genetics **made possible** a wide range of new technologies.

ここで名詞の前に置かれた on を前置詞と区別できなくなるのが, つまづきの元ですから, 上のようにこの構造の成立過程を説明することには大きな意義があるでしょう。

3. 和訳は意味にあらず

ここまではものの位置とか方向のような空間的＝具体的な意味を見てきました。でも前置詞の威力はそれがメタファ的に用いられたときに発揮されます。

たとえば look for という典型的な「熟語」を学生たちはどう覚えているでしょう? 次の問題を見てください。

7) Are you sure you lost your key? Look () the top drawer.

1. at 2. for 3. up 4. in (早稲田大学)

一見簡単な問題です。ところが, かなり英語のできるクラスでさえも, 約半数が 2. for を選んでしまうのです。次に多いのが 3. up で約 3 割。正解の 4. in を選べるのは 2 割に満たないのです。この, 英語の native speaker であれば, おそらく 5 歳児でも間違えないと思われる問題を, 難しい英語の論説文をたくさん読んでいる大学の受験生のほとんどが正解できないのです。

この結果が示していることは, ほとんどの学生が, look for 「～を探す」, look up 「～を調べる」という訳語を丸暗記しているだけだったということです。これらの表現を本当に知っていると言えるようになるには, どうすればよいでしょうか。

look for は look と for でできているのですから, この for の意味を正しく認識すれば look for の意味を知ることができるはずですが, まず for の基本的な意味を考えましょう。

8) **He went to Paris**.

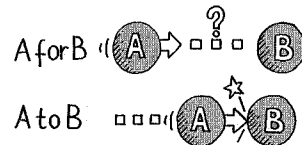
9) **He left for Paris**.

SPO 式に考えてみてください。He が前置詞句 to Paris, for Paris の「主語」です。8) と 9) の明らかな違いは, 8) では He が Paris に達していることが含意されているのに対し, 9) では He は Paris に向かってはいても, 達したという含意がないということですね。同じような違いが次の 10) と 11) にも当てはまります。

10) **He looked at the key**.

11) **He looked for the key**.

10) では彼 (の知覚) は (メタファ的・抽象的意味で) key に達していますが 11) では達していません。9) と 11) の for は次のスキーマが示すような共通の意味を持っていると言えるでしょう。



あるものに到達していないからこそ, 人間はそれを求めます。ここから「願望・欲求の for」と言うべき用法が生まれます。問題 7) では top drawer は「願望の対象」ではないので, for ではおかしいことが理解できます。すなわち「look for + <願望の対象>」という意味構造がわかります。探す対象がありそう

な「場所」をも目的語にできる，日本語の「～を探す」という動詞とは大きく違っていただけです。「look for ≠ 探す」です。これで本当に look for の「訳」ではなく、「意味」をつかんだと言えます。

4. 熟語をグループでつかむ

次に上と同じ意味の for を含む表現をグループ化してとらえれば，この for の意味に対する認識と熟語の知識が相互に強化されます。『UPGRADE 英文法・語法問題』では次のような表現を，動詞とか形容詞とかいう区別をせず，「願望・欲求の for」をキーワードに，グループとして学ぶように工夫しています(p. 329 参照)。

call for A	「Aを必要とする」
apply for A	「Aに応募する」
wait for A	「Aを待つ」
What ~ for?	「何のために～か」
be anxious for A	「Aを熱望している」
for pleasure	「楽しみのために，遊びで」

search A と search for A の違いもここで扱っていますから，作文で次のような誤りもしなくなるでしょう。

12) × I didn't know what the word meant, so

I searched for the Internet. (→ for は不要)

次に look up はどうとらえればよいでしょう？ まず典型的な例文を見てみましょう。

13) I looked up the word in the dictionary.

「その語を辞書で検索した」

このように look A up in B の意味は「調べる」というより「A(情報)をB(リスト・記録など)の中で検索する」です。さて，これをどのように分析し，分類すればわかりやすいでしょう。次の表現に共通する意味を考えてみてください。

a) A show up 「(約束の場所などに) 現れる」

b) come up with A 「Aを思いつく，提案する」

c) look A up in B 「AをBの中で検索する」

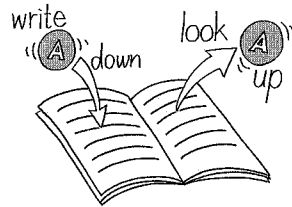
A を up の意味上の主語と考えてください。a) ~ c) に共通するのは，「A が up の状態になる = 出現する・出てくる」という点です。b) では A(考え)は意識，あるいは議論の場に現れます。c) では A(情報)が記録から取り出されます。この点を踏まえて『UPGRADE 英文法・語法問題』ではこれらの表現を「出現の up」のタイトルでグループとしてまとめ

ています。(p.345)

次に，この up の意味と，次の文の down を比べてみてください。

14) She wrote down my name in her guest book.

write A down, put A down などでは look A up とは逆に A が記録された状態になりますね(p.351 「記録して」の down)。他に Your name will go down in history. 「君の名は歴史に刻まれるだろう」などもこの down を含む表現です。



5. おわりに

このように，「熟語」の構成要素の意味を意識し，その意味を共有する表現とともにグループ化し，さらにはそれと対立する意味のグループと関連づければ，「熟語」の知識は丸暗記したときとは比べ物にならないくらい揺るぎないものになるでしょう。そのとき，これまで見てきた例からおわりのように，「前置詞の目的語」に加えて，「前置詞の(意味上の)主語」という概念を導入し，SVO ならぬ SPO という主述関係のユニットでとらえると，熟語の構造を分析的に理解しやすくなるのではないのでしょうか。

S + P - O 「S(前置詞の主語)がO(目的語)に対してP(前置詞)である」

皆さんも丸暗記していた「熟語」を，「SPO」の視点から見直してみたいはいかがですか？ きっといろいろとおもしろい発見があることと思います。

参考文献

- 刀祢雅彦(2005)『前置詞がわかれば英語がわかる』ジャパンタイムズ
 霜康司・刀祢雅彦・麻生裕美子(2005)『UPGRADE 英文法・語法問題』数研出版
 霜康司・刀祢雅彦(2002)『システム英熟語 Ver.2』駿台文庫
 刀祢雅彦・霜康司(2000)『英熟語フレーズマスター』学研